

# アマターナの定義並に構造について

高 島 寛 我

アマターナの定義については、従来、既に述べたのであるが、今、出所を挙げて、右い所から述べて見ると次の如くであろう。

先づ、英のホッダリン (B. H. Hodgson) 氏は、その著「尼叔罗及び西藏の言語、文学、宗教についての論」(Essays on the language, literature, and religion of Nepal and Tibet, p. 15) に於て「アマターナとは現世の生存の諸の行為の果報即ち道德法 (the fruits & actions or moral law of Mundane existence) を極うものであると、次に露のワシリエーフ (Vassilief) 氏はその著「仏教その教義その歴史及びその文学」(今仏訳に依れば Le Bouddhisme ses dogmes son histoire et sa littérature) に於て「アマターナとは、一種の伝記 (une sorte de biographies) を含むものであると、仏のビエルヌーフ (Burnouf) 氏はその印度仏教史序論 (Introduction à l'étude du Bouddhisme indien, p. 57) に於て「アマターナは實際には、業の果報を取極うものであるが、併し、かかる定義は物語、物語風の話 (légende, récit légendaire) を意味するアマ

カーナなる言葉の本来の意味を吾々に与へ、いと、次に和蘭のケルン (Kern) 氏はその著印度  
仏教提要 (manual of Indian Buddhism p. 7) に於て十二分教の名を列挙してアフター  
ナを第七位に置いて居るが別に二二では説明を加へていない。併し同じ著作の「印度に於ける  
仏教とその下史」(これは拙仏訳あり) (Der Buddhismus und seine Geschichte in  
Indien p. 59) 仏訳ならは Hiteise du Bouddhisme dans l'Inde, p. 200) に於て、ア  
フターナとは巴梨ではアパターナであるが、物語であり、聖者達の前生に於ける立派なる行為  
の記述である。北方の人達も、阿育のやうな敬虔な王の運命を対象とするアフターナを有する  
と、

以上挙げた台氏の説はアフターナの様相を語つて居るとはいへ、その定義は充分ではない。  
次に、マックス・ミュラー (H. Max Müller) 氏の説、梵語大辞典のアターナの項、フエー  
ア氏、スパイエル氏、ギンテルニッツ氏等の説は他所で述べたので今茲では述べてないが、大辞  
典並にマックス・ミュラー氏の、アフターナを諸根、ava + dāy 淨めるより来れるものとする  
説は、佛教に於けるアフターナの内容にふさはしいと思はれる。次でアフターナの研究に貢献  
したフエーア氏の定義は語源に付いては述べていないが、上記のものより適切な表現であると  
考へられる。今その原文を引用すれば次の如くである。

*L'Aradana est une induction qui démontre, par les faits, le bien qui  
existe entre un acte et sa conséquence inévitable.*

「アフターナ」とはある行為とその避け難い果報との間に存する關係を事實に依りて証明する故  
訓である。即ちスパイエル氏に依つても既に云はれた様に、仏教徒にとりては、信じ難い充分

なる理由を持たない限り、アラターナは物語（*legend*）でなく、実際に起つた事実である。これにつき、アラターナ説話の構成を考ふるに次の要素より成れるものと思はれる。

- 一 仏陀を見奉る（*Buddha darśana*）
  - 二 心を淨化すること（*citta - prasāda*）
  - 三 仏陀の説法（*dharma - dēśana*）
  - 四 仏陀への布施、供養其他の敬虔なる行爲（*dāna, puja, etc*）
  - 五 誓願（*pramīdhanā*）
  - 六 仏陀の授記（*vyākaraṇa*）
  - 七 果報（*vipāka*）
  - 八 教訓（*cikāśā*）
- 今この事を理解するために、百緣經のオ一話を引用して見よう。

滿賢婆羅門遙請仏緣（撰集百緣經オ一話）

仏陀世尊は王、輔相、富者、部民、長者、商主、天、竜、夜叉、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩  
摩羅伽、等に恭敬し尊重承奉し供養せられ、かく天竜、夜叉、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩  
摩羅伽に礼敬せられ、仏陀世尊はよく知られ、大功徳を有し、衣、食、牀、座、病、縁、医、藥、資具を得ら  
れ、声聞衆と共に王舍城に依止せられ、迦蘭陀竹園に住せられた。その時世尊は正覺を得ら  
れて、時たにす、その名声、一切世界に満ちて居た。この時南方の山の国王に、滿賢と名く  
る大家主が住した。富み、大財、大受用を有し、広大なる眷属をもち、多聞天の如き財を有し、多  
聞天の賊に匹敵するのであつた。彼れ又信あり、徳あり、善美の性にして、自他の利を望み悲愍に

して大心であり、法を愛し生類に親しく盜賊を好み施与を好み施與を喜び、大なる慈施を行  
うた。かくて彼は一切の外道の爲の祭供を企て、ここにて幾十万の外道の徒を供養した。頻毘  
沙羅王がその從臣と共に世尊により教化せられた時、その教化より幾十万の生類が教化を受  
けた。その時王舍城から滿賢長者の親戚が来りて滿賢の前にて佛法僧の讚歎を説き始め、  
この時喜める滿賢婆羅門は世尊の諸徳の卽善を用いて大なる淨信を得たのである。それより  
屋上に登りて、王舍城に伺ひて立ち、兩膝輪を地に着け、諸の花と香と水とを投じ世尊に乞  
ひ始めた。世尊はわが祭供に来らるべし、祭場に至り給へと、この時、かの諸花は諸仏の仏  
力と諸天の天力に依りて世尊の上に花蓋となりて止り、香は雲の峯の如し、水は琉璃柱の如  
くにはつた。

この時長老阿難は合掌して世尊に問ふた。大徳よ、何処よりこの招請はつたのですかに  
と、世尊は宣うた。南方の山の園土に滿賢と稱する大家主が住する、そこへ吾々は行かねば  
ならぬ、比丘直よ、用意してあれと、世尊は今の比丘衆に團結せられ南方の山の園土に行旅  
を行じ滿賢大家主の衆の如くに住まりて思慮せられた。吾は滿賢婆羅門を神通神受到依り  
て帰還せしめようではないかとここに世尊は、かの今の比丘衆を脱して獨り鉢を穿らに求に  
して、三十二の大人相に飾られ、八十の小相にて輝く身を有し、一尋の光に莊嚴せられ、今  
の太陽に過ぎたる光を有し、動ける宝山の如く普く徳祥ある世尊を見奉つた。見て急ぎ急い  
で世尊の傍に近りて云うた。康安あれ世尊よ、座せらるべし、われの攝受の爲に、施食の納  
受が爲さるべしと、世尊は宣うた。汝に擡てらるべきものあらば、この鉢の中に与へられ  
よと、ここに滿賢婆羅門大家主は五石の徒弟に圍繞せられ、世尊に檀々の瞻養、嗽養、紺め

飲み、吸はるべき食物にて鉢を充滿し始めた。世尊も又自分の鉢より比丘象の鉢へと食物を移し給うた。世尊が今の比丘象の鉢が満されたと知られた時、その時自分の鉢が満されたと思ひ給うた。それより、満ちたる鉢を有する今の比丘象を半月の形にて示し給うた。虚空に住した諸天によりても世尊の比丘象の鉢が満たされたという声が発せられた。

この神通が現れたるより、満賢大衆は淨信を生じ、木が根より切り去られた如く、喜び、歡び歡喜し、思しき喜樂を生じて世尊の兩足に依して菩薩をなし始めた。吾はこの善根により、この心の生起により、施物の祐施によりてこの導師なき、指導師なき闇黒の世界に於て、覺者となるであらう。また末度の有情の爲めに防護者となり、解脱せざるものの爲に解脱せしめるものとなり、未受樂者のために安慰者となり、未だ涅槃せざるものの爲に涅槃せしめるものとなるであらう」と。

この時、世尊は滿賢華羅呵太家主の四の次弟、業の次弟とを知り給うて、笑を示し給うた。ゆに法として諸仏世尊が笑を示し給うその時には、青黃赤白の諸の光が御口より出で、ある光は下に行き、ある光は上に行く。

### 以下中略

この下世尊の御口より放たれた光が下は諸の地獄に至り、上は諸天に達し、三千大千世界を圍繞したる後、世尊の背後より隨從する、かくてその光は三たび世尊を石繞して、世尊の頂にて隱蔽する。この時阿難は、諸仏が因なくして微笑を示し給ふをなきが故にその事を質問する（この全文の和訳は大正三年度六條學報附録百五十六頁以下樹博士の和訳を参照せられたし）世尊は宣うた、阿難よ、正にその通りである、匪縁なくして、阿難よ、如來應供正等覺者達は

微笑を示し給はない、ここに阿難よ、滿賢大家主はこの善根により、この発心により、施与物の施捨により、三阿僧祇劫を過ぎて菩提を成就し大悲心を修め、六波羅蜜を圓滿して、十力と四無畏と三不失念住と大悲とを具したる滿賢と名ける正等覺者となるであらう、これがわれに對する心清淨の表はれであるところの彼れの施与法である、世尊によりて、滿賢婆羅門大家主が無上正等覺者に授記せられし時、その時滿賢婆羅門により、世尊は声聞の象と共に三ヶ月の間、樂場に於て飲食を供養され給ひ、更に彼れによりて種々の善根が植えられた。

この故に、これ比丘座よ、かように學ばねばならぬ。われらは師を恭敬し、尊重し、承奉し、供養するであらう、われらは師を恭敬し尊重し、承奉し、供養し、師に依止して住するであらうと、比丘座よかく我等に學ばなければならぬ。

と、かく世尊は悦びて宣うた、比丘座は世尊の所説を歡喜しました。

#### 滿賢遙請仏縁 畢る

以上が梵文の和訳であるが、漢訳を対照すればその逐字的には一致せざることが知らるるであらう。この説話は先に述べたアヲタナを構成する要素の項目と一致しないやうであるが、通常はオーに見仏が来るのであるが本話にては滿賢婆羅門がその親戚より仏の讃歎を聞くのであつて、これが見仏に當るのである、オ三の仏陀の説法が見えないやうであるがこれは本話にては仏陀の神通神變がこれに當るものと解せらるゝ。その他の項目に付いては別に異論はなきことと思はれる。

石のアヲタナの内容に付き從來の學者はこの説話の結論としての教訓に「ひたすらに黒き業因にはひたすらに黒き果報ありひたすらに白き業因にはひたすらに白き果報あり、黑白雜は



れるものには黑白雜はれる果報あり、この故にひたすら黒き業因と黑白雜はれる業因を捨てて  
ひたすら白き業因に力を致すべきで、かく汝に學ばるべきである」とありて多数のアワターナ  
の結語をなすが故に、アワターナとは現世の業因果報の道德法を取扱ふものであり、進んで、  
業の法則とその最高の強制的な力を實際に起つたものとして現はされる事實によりて説明する  
ことがアワターナの本質的な性質に属すると巫べているのである。勿論この事は一面の真理で  
はあるけれども、自分らびしろアワターナの中心思想として留意すべきは上に挙げた内容の中  
で、心の淨化と布施供養等の仏陀への恭敬行為、及びそれに基く證果への誓願であることを強  
調したのである。これは自分が南方のアパターナ、及び北方のアワターナを讀んだ後に共通  
の思想として知り得るところである。即ち西方のアパターナに於ては上巫の業の法則に關する  
結語を巫ぶるには至らず、全篇を通じて心の淨化と施与とその果報とを熱心に告白しているの  
である。又經文百緣經に於て一々の説話の結語として前述の業因果の法則を巫べる常用句のあ  
る説話は相当多数あるけれども、又心の淨化 (*citta-prasāda*) と施與法 (*dāyadharma*)  
の如き施與 (*dāna*) に重きを置く説話も相当多数に存することを見れば十分である。後期  
の大衆的教綱を加へたアワターナに至りては仏道の誓行 (*vratā*) を基礎として、心清淨と施  
実行とを巫べ、十波羅蜜行を説き、極衆仏國への未來生往に及び、全篇を通じて各説話の結語  
として菩提行を完うして正覺の地位 (*sambuddhakapāda*) に到達せんことを強調するのであ  
る。優婆塞多尊者在阿育王を対告者として、一切衆生を度脱し、全国土を正法化すべきことを  
力説し、眞實の未來教を宣布するものである。

